研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-137		21-056	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　三浦克之

題名（原題／訳）

Alcohol use among older adults and health care utilization
高齢者におけるアルコール摂取と医療利用

執筆者

Cristina B. Bares, Ariel Kennedy

掲載誌

Aging Ment Health. 2021 Nov;25(11):2109-2115. doi: 10.1080/13607863.2020.1793903.

キーワード	PMID
アルコール、老年医学、健康行動、医療利用	32757773

要　旨

目的：医療機関利用頻度と飲酒量との関連について、米国全土の高齢者を対象に検討した報告はない。本研究は、このギャップを埋めるために、米国の高齢者における医療利用の様々な側面が飲酒とどのように関連しているかを明らかにすることを目的とした。

方法：2006 年から 2016 年の National Health and Interview Survey に参加した 65 歳以上の高齢者 138,676 人（女性：56.9%）の横断的パネルデータのうち、全変数のデータが揃う 106,511 人を対象に、全体および人種・民族グループごとに分析した。飲酒歴は質問票によって調査を行い、「生涯禁酒」、「過去飲酒（過去 1 年間飲酒なし）」、「現在の機会飲酒」、「現在の適量飲酒（男性；3-14 杯/週、女性；3-7 杯/週）」、「現在の多量飲酒（男性；14 杯/週以上、女性；7 杯以上/週」に分類した。飲酒歴の各カテゴリーと、人口統計学的変数（性、人種、学歴、配偶者の有無、喫煙習慣）、医療関係者との相談、医療機関への受診、救急外来(ER)/救急科（ED)受診との関連は多項ロジスティック回帰分析を行った。

結果：飲酒歴に関して、対象者（平均年齢 74.1 歳、標準偏差; 0.04）の約 70%は生涯で飲酒経験があり、15.8%が現在適量または多量飲酒者であった。調整済み多項ロジスティック回帰の結果、生涯で飲酒経験者は、生涯禁酒者よりも最近の医療関係者との相談回数と医療機関受診が多かった（現在の多量飲酒者は含まれない）。性、人種、学歴、配偶者の有無、喫煙歴調整後、過去飲酒者は ER/ED 受診回数が多かったが（相対リスク比(RRR): 1.08, p=0.043）、現在の機会飲酒または適量飲酒者は生涯禁酒者よりも ER/ED 受診回数が少なかった。飲酒と喫煙の併用に関しては、生涯禁酒者よりも時々または毎日喫煙する者は、現在の機会飲酒・適量飲酒・多量飲酒者である可能性が高いことが明らかになった。

結論：飲酒歴のある高齢者は、生涯禁酒者よりも最近医療機関を受診した回数が多く、診察回数も多い（ただし、適量または多量飲酒者除く）。しかし救急外来受診回数は少なく、飲酒量の増加に伴い、診察を受けていない可能性があるため、注意が必要である。